



## 2016年度 日本語教育研究法B シラバス

### 1 目標と意図

「研究法」には2つの意味がある。1つは、「分析の方法」「調査の方法」といったように、“method”としての研究法である。しかし、こうした“method”は、「何のためにその方法を用いるのか」という研究の「問い」「観点」「テーマ」の存在なしにはありえない。料理の道具は、どのような料理を何のためにつくるのか、という視点なしには役に立たないし、存在の価値すらわからないのだ（離乳食を作らない者にとって、「ブレンダー」を持っていても使うことはないし、そもそも何のために台所にあるのかもわからないだろう）。そこで浮かび上がる「研究法」の2つ目の意味は、「テーマへの接近法」である。この授業では後者を取り扱う。

かつて研究＝「客観的なもの」「一般化するべきもの」が中心であった時代は、日本語教育研究を牽引するためには、第二言語としての英語教育の研究である「English as a Second Language Education」に関わる文献とその動向の理解は必須であった。しかし、日本語教育研究が「social turn」「言語論的展開」を契機に「社会的文脈」を意識した質的研究に軸が移りつつある現在、研究がローカルな文脈を重視するにつれて、「Second Language Education」としての海外の研究動向が見えにくくなる。しかし、それでも海外での社会的文脈を意識した研究がどのようなテーマを、どのような目的で進めているのかの理解は、研究の潮流の把握としても、研究の着想の基盤としても、欠かせない。

この演習では、“*Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning: Volume II*”を取り上げて、

- 1) いわゆる海外の第二言語教育の研究の動向とその観点がどのようにになっているのか、なぜそのようなテーマが今論点となっているのか、を探る。今年度はとくに「第二言語の教授と学習の研究における社会的文脈 (Social Contexts in Research on Second Language Teaching and Learning)」を取り上げる。
- 2) そうした研究の観点は、日本語教育の文脈に置き換えると、どのようなものになりうるか。
- 3) 2) のような研究はどのようにすれば実行できるか。そうした研究はすでにあるか。

——というような観点で進めることによって前述の「日本語教育研究の新たなテーマの可能性」に接近していく。

これは、将来「日本語教育」を実行・推進していく際に必要になってくる「日本語教育実践の現場の捉え方、その実践現場における教育の具体的設計」をそれぞれが立案、実行していく際の「研究動向」を捉える重要な視点となる。

### 2 評価

#### (1) 発表の質 70%

発表は、以下のように進める。

- ・受講者は全員必ず課題論文を読んで参加すること。発表を聞いているだけでは理解も議論も不可能。
- ・発表者は、以下のことをレジュメにまとめ、20分で発表を行う（日本語）こと。
  - ① 執筆者の紹介
  - ② 論文の要約。「問い」と「答え」と「根拠」で説明していくことを意識的に行うこと。((a) 執筆者の隠れた「問い」を明示。(b) 各章節の問いの構造を明確に (c) 問いの答え (d) 答えの根拠となる例やデータをできるだけ示しながら説明できるとなお良い。
  - ③ 日本語教育の文脈に置き換えるとどのような研究になりうるか。類似研究があればそれも紹介できると良い。

#### (2) 各回の議論への参加度 30%

### 3 授業担当者

名前 南浦 涼介

研究室 人文社会科学棟2号館2階（「E」の字型の校舎の「|」部分の2階）

連絡先 minalabo（あつとまーく東京学芸大学）

ウェブサイト <http://www.u-gakugei.ac.jp/~minalabo/index.html>

発表したレジュメは、春学期の授業同様、ウェブサイトに掲載をします。そのため、発表後1週間以内に修正をして、南浦にメールで送信をすること。

## 4 展開

日にち	内 容	発表担当者
第1回 10/17	<b>導入—オリエンテーション</b>	
第2回 10/24	<b>導入—日本語教育における研究の動向と課題1</b> 以下のレビュー論文を分析する。 ●本田弘之, 岩田一成, 義永美央子, 渡部倫子 (2014) 「第1部 日本語教育研究レビュー」および「第3部第13章 日本語教育研究のこれから」(所収: 同著者ら『日本語教育の歩き方—初学者のための研究ガイド』大阪大学出版会)。 1) 「日本語教育研究」を研究する目的 (pp.3-15.) 2) 日本語に関する研究 (pp.15-28.) 3) 学習者に関する研究 (pp.29-46.) 4) 教育と社会に関する研究 (pp.47-67.)	
第3回 10/31	<b>導入—日本語教育における研究の動向と課題2</b> 以下のレビュー論文を分析する。 1) 市嶋典子, 牛窪隆太, 村上まさみ, 高橋聡 (2014) 「実践研究はどのように考えられてきたか—日本語教育における歴史の変遷」, 細川英雄, 三代純平 (編) 『実践研究は何をめざすか—日本語教育における実践研究の意味と可能性』(pp.23-49.) ココ出版。 2) 柳田直美 (2015) 「研究実践を『知』にむすぶ」, 神吉宇一 (編著) 『日本語教育 学のデザイン—その地と図を描く』(pp.55-76.) 凡人社。 3) 大場美和子, 中井陽子, 寅丸真澄 (2014) 「会話データ分析を行う研究論文の年代別動向の調査—学会誌『日本語教育』の分析から」『日本語教育』159, 49-60. 4) 義永美央子 (2016) 「日本語教育における談話研究の現状と展望—学会誌『日本語教育』掲載論文の分析から」, 三牧陽子, 村上貴子, 義永美央子, 西口光一, 大谷晋也 (編) 『インターカルチュラル・コミュニケーションの理論と実践』(pp.221-238.) くろしお出版。	
第4回 11/7	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る—全体像をつかむ</b> “ <i>Handbook of Research in Second Language Teaching and Learning: Volume II</i> ” (2011) の目次と前書きの分析から、概要とその特質をあぶり出す。	
第5回 11/14	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る1</b> Dual Language Education	
第6回 11/21	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る2</b> Teacher Education and Teacher Development	
第7回 11/28	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る3</b> Learning to Write in the Second Language: K-5	
第8回 12/5	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る4</b> Social Practice and Register: Language as a Means of Learning	
第9回 12/12	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る5</b> Vocational ESL	
第10回 12/19	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る6</b> English for Academic Purposes	
第11回 12/26	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る7</b> Research in English for Specific Purposes	
第12回 1/16	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る8</b> English as an International Lingua Franca Pedagogy	
第13回 1/23	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る9</b> Teaching English as a Foreign Language in Europe	
第14回 1/30	<b>英語文献から「第二言語教育の最前線」を探る10</b> World Englishes: Contexts and Relevance for Language Education	
第15回 2/6	<b>まとめ</b>	